

「ヘエ、ほんに鰻や、常はん御免」

と盃を取りに来る其手を確りと握りまして手首をなぞました。

「アハ、、、常やん丸いで……」

門口から中へ飛び込んで参りまして襟首を取つて押へ付けました。

「オ、貴郎は常はん」

「お師匠はん心配しなはんな、これお前は何者ぢや、どつこい逃すもんか、コレ云はんか、云はな煙管で殴るぞ、コレ云はぬか〜」

「ハイ、モモ申します、申します。頃は人皇一百七代正親町院の御宇、山城大和二ヶ國に田鼠と云ふて田畑を荒す鼠つきしが、民之を悲しみ時の陰陽師に占せば、高位に仕へられたる三毛猫の生皮を以て三味に張り、天に向うて弾く時は濕ひ忽ち地に落ちて、田鼠悉く去るとの事、私の親、其頃伏見の院様に仕へしが、一旦御用を相勤め、民の困窮を救くひしが、如何なる業因深きにや兩親共三味に張られ、親を取られし其頃はまだ毛も揃わぬほんの仔猫、ごろにやん〜と尋ぬるかいても唯泣くばかり、親の仇を討たずんばあれは盗人猫よ野良猫よと云はれるが悲しさに、所々方々とさ迷ひ尋ぬるうち、廻り廻つて其の三味が此家に有ると聞きしゆへ、假りに常吉様の御姿となつて、當家へ入り込みしは、あれ〜、向ふに掛つてある彼の三味線の表皮は母、裏皮は父、私は彼の三

味線の仔でござります。にやん」

「ア、猫や、夫れで事が解つた。併し今度の會は當るで、千本櫻の役割がすつかり出來てる」

「そうか」

「マア俺が差し詰吉野屋の常吉で義經や」

「成る程」

「お前が駿河屋の次良吉で、駿河の二郎や、年長で古いのんが龜屋の六さん、龜井の六郎、伊勢屋の三郎兵衛旦那が伊勢の三郎、此家の父親さんがお伊勢詣りのお供に従いて行てる辨慶で、此猫が俺に化けて毎日酒を只飲んでるので、猫のたゞのむとちやんと出來てる」

「常やん肝心の靜御前が無いやないか」

「何を云ふてるね、お師匠はんや、名前までがお靜さん、そこで靜御前や」

「成程」

「阿呆らしい、妾の様なお多福が靜御前やなんて、似合ますか」

猫が頭を上げて、

「ニヤウ〜」